ミオヤの光

新約の卷

如来を本尊とす……一
人佛と天佛……六
法蔵比丘と悉達道士……一〇
旧約と新約……一三
涅　槃……一九
須摩提と涅槃……二〇
付録、辨栄上人の御慈訓……二七

如來を本尊とす

宇宙全體を通じて物質と心質とは、本一體なれば、これを宗教的に法身ビルシャナと云ひ、また密教には金胎不二の大日と號く。物心不二の靈體なれば何とも名の名づくべきなし。絶對の大靈と名づく宇宙全體はこれ大靈なり。宇宙は本來絶對なれども二方面に現れ甲を自然界乙を心靈界となす。絶對の大靈を宗教的に表號せば卽ち法身毘盧舍那如來と名づけ學語に眞如と云ふ。眞如とは宇宙は現象卽實在にして絶對無限一如の靈體なれば萬有の體として萬法と現ずれども本來如々三世に通じて變ることなし。此の眞々如々の心靈體の不可思議の能力より顯現するを來と曰ふ。故に如來とは眞如の大靈より顯現し來たる尊體に名づく。眞如の力より自然界に現れ來て最も威力あるものを太陽となす。然れば卽ち太陽は自然界に現じたる如來と曰ふべし。眞如の一大靈力より心靈界に顯現したる大威神光明者を無礙光如來と號く。若し天體に太陽

なかりせば地球に一切の生物界は生存すること能はず。大靈は自然界に太陽と顯來し太陽より地球を發展し、太陽と地球との力用に依りて地上に生物を生成し、一切の生物は物質的の生命身體の機能は太陽と地球とにうけ心靈は內にして萬物內存の靈性なれば生物生命の內に存在す。故に地上の生物の發生は極小の生物にも內に伏能せる靈性は內より進步せんとの性能の存在して益々向上せんとす。然れども外胞的身體は外界の因緣因果に規定せられて、有機的生命は外緣の助成にあらざれば發達すること能はず。地上の萬物は盡く大靈內存の因緣規定的生物なれば、何れも相互に刺激し相扶けて發達す。本一體より種々無量に發達したる萬物なれども、生物は極小より漸次に因緣因果的に相續するごとに進化し、數多の階級を經て竟に人類と現化す。原始人類より益々進みて文明の人類となつたには無數の階級を經たり。

宗教的進化の見解とすれば、宇宙の大靈は自己より世界にと發展し、世界に生物を發展し、大靈は萬物の本源、これを具體的に表名せば大**ミオヤ**とす。

大靈は萬物內存なれば、世界性の太陽及び地球も同じく大**ミオヤ**の分現なれば、矢張り**ミオヤ**と同じく一切の生物を分產し生成する能力を有し漸次に生長せしむ。第三生物性もまた三展したる靈體なれば**ミオヤ**と同分なる性體を具有し卽ち因緣因果の法に則り造化の用をなす。卽一切の生物に生殖の作用あるをもつて知るべし。

生物進化して人類の文明的に成る時は內に伏せる靈體は內に潛勢力を養はれ內より萠發せんとの氣分あり。然れどもそれが靈性を開發して靈的生活を現化せんには、また大靈の大靈力の大增上緣てふ大勢力の助成機關をまたざるべからず。是人生に宗教の出現せる所以なり。

心靈界の太陽

宇宙大靈卽ち眞如は一切の生物を靈性的生命として大靈自性の光明に同じ、自己と同じく永遠の生命として大靈自性と同じき靈的生命とし、靈的生活を現化せんが爲に

心靈界に心靈的太陽とも曰ふべき舍那圓滿の無量光如來を顯現して、心靈界の太陽として衆生界の心靈を攝取し、同化して靈的生命とす。經に阿彌陀佛光明遍く十方世界を照して念佛の衆生を攝取して捨て玉はずとはこれなり。

若し宗教の見地より見れば、肉の生命は靈の生命に現化せんとの手段にして、靈的生命に入るはこれ目的なり。心靈界の太陽法身無量光如來の光明に依らざれば、衆生の靈的生活不可能たりとは、太陽の力によらざれば肉的生活の不可能なると同一なり故に大乘佛教は力を極めて靈界の太陽なる無量光如來の靈力本願力を力説す。

無量光如來を太陽と比例せば、次に生物界に入りて三展せる衆生界に、靈界にも三展せる救靈者出現せざるべからず。衆生界に應じて人間の身をもつて救靈の福音を宣傳したる佛陀釋迦牟尼是れなり。佛陀は靈界の太陽たる無量光より自性靈的分現なれば太陽地球の天的氣勢を稟けたる衆生性とは相同じからず。衆生性と佛陀性との性質に付ては佛陀性は無量光の人身に現じて其の靈格より發射せる靈的光明は無量光の顯現なり恰も金剛石に日光の反映するに例ふべし。故に吾々は佛陀を通じて無量光を見ることを得佛陀は即ち無量光である。佛陀を離れて無量光に接すること能はざれば例へば太陽は天に在つて大威力を生物に及ぼすも地球なければ生物は生存すること能はず。

佛陀の生命ある福音は是我等が靈の生命である。靈の生命はまた太陽なる無量光の靈力に依らざるべからず。太陽あり地ありて肉の生存し得る如く、如來光あり佛陀の傳ありて我等が靈的生命は生存し得るものである。我等世に佛陀の教法なかりせば此の福音なかりせば何にて靈の生命に入ることを得べけん。

大靈顯現の如來は自然界に太陽と顯來し、靈界に無量光と顯來す。故に吾等はまた靈の生命に由らざる程は、たゞ太陽の能力のみにて生存したるべきに、今は無量光裡に靈力を仰ぎて靈の生活し得るに至りしなり。

自然の太陽の能力によりての生活は竟ひに人類のみに止まらず、動物も精神も一切

の物は盡く太陽の力により生活せり。

靈界無量光によりての生活は、人類中に於て靈の生命に入りしものゝみ靈的生活をなして、これも心靈に不可思議の美味を感受す。無量光より靈の生活に入る人に對して與ふる處の靈感をアミリタ即ち甘露の妙食とす。アミリタとは法身慧命を保存せしむる靈的食物に名づく。一切の聖人及靈的生活に入るものは、無量光明の太陽の光の下に常に甘露の法食を靈に享受しつゝ生活す。已に信心開發する時は肉眼に太陽を見る如くに靈は無量光を觀る。太陽に即して無量光を仰ぐ。娑婆に即して寂光土を觀る。而して無量光如來を自己の本尊としてこれに歸命信賴し奉事する信念をもつて生活す。これを本尊とす。

人佛と天佛

佛とは一切衆生を教化度脫して生死を超え涅槃に入らしむる救世主である。世の神に天神地祇あり。則に天則人則あり。此理法は高等なる宗教にも此の形式は益々發達したる形式として現はれたり。是法身佛と現身佛、即天佛と人佛との二法身を立る所以である。基督教に父と子即ち天の父と子なる基督、毘紐努教のビシュヌと十方化身の如き、また高等梵天と劣等梵天との別の如き、何れも甲は天神で乙は人神である。

佛教は同一佛教でありながら種々の方面に向つて進化し、また發展して同一の根底ならざるやに感じらるゝあり。然れども佛陀を立るに大小乘相同じからず。小乘教には唯人佛なる釋迦佛陀の外に法身佛(天佛)を立てず、是小乘教が宗教として完全ならざる所以である。

大乘佛教は現身佛には必ず其本地なる法身佛なかるべからざる理、思辨のみにあらず實地宗教として、法身常住不變の法身の存在を信ずるにあらざれば、眞實に信仰に至るべからず。されば大乘佛教には、何れも常住不變の法身に信仰を成立せしむ。天に在て(天とは心靈界、または淨土、神國)大威神力大慈悲力大光明を以て衆生を攝取し

玉ふ尊體を法身とす。其法身より分れて人身を現じて衆生を教へて法身佛に歸命信賴すべきことを傳ふるものを人佛と云ふ。

法身佛と現身佛の關係は、現身佛は本法身佛より人格現の佛にて、法華に久遠實成の如來は釋迦佛陀の現身佛と現じ、而して本佛の本願大威力を示して衆生に歸依せしむ。

華嚴經には全宇宙を蓮華藏界として、盧舍那如來は法身佛にして、釋迦は現身佛、盧舍那如來が本師の戒を誦する時に、釋迦は諸の大衆と共に法佛の說戒を聞く。

無量壽經には、法身佛は無量壽佛威神光明最尊第一にして、十方一切諸佛の爲に歸依讚歎せらる。釋迦及十方諸佛は現身佛にして、無量光如來は法身佛なり。

法華經に久遠實成壽命無量にして慧光照無量の如來は法身佛にして、五百塵點劫の往昔より久遠に成佛して、盡未來際に至るまで壽命極盡あることなし。常恒靈鷲山及常寂光土に安住して、一切の處に徧滿せざる處なけれども、或人は常住の法身を見ることを得或人は見ること能はずとは是法身にして、始めて現身に見るは人佛である。

法身佛は一切佛を　て一佛とす。法身の一佛が現身の一切諸佛と現ず。法身の一佛を離れて現身の一切佛あることなし。現身の一切佛を離れて、法身一佛の力用を現ずる能はず。諸大乘教所說の佛は二身佛に出でず。

密教に所謂大日毘盧舍那如來、華嚴經の遮那圓滿如來、法華久遠實成の無量壽如來無量壽經の無量光如來、釋迦隨緣隨機の爲に其說く處或は異なりと雖も、同一の法身佛にして二佛あることなし。

現身佛もまた一法身の現身なれば、十方三世に互りて一切諸佛は悉く一法身の所現身である。されば法華經過去燃燈佛或は　等の年紀の不同名字の種々には現したるも廣く十方世界に堅に三世に互りて番々出世の諸佛と成りて其諸佛が或は各々其名字は異にして壽命年紀等は不同にはあれども、そは唯現身の上に異あるのみにて、法身の本地に入つて見れば決して他の佛にあることなし。

法華の久遠實成の無量壽と無量壽經の無量壽とは同一の佛にして異ることなし。一切諸佛の本地一切諸法の歸趣する所。

法華經の久遠實成の無量壽と無量壽經の無量壽佛とは同一の佛なることは光明名號一大事因緣經を參照。

彼經に法藏比丘無量大願を發し　衆生を度すと雖も其實は久遠實成本有法身無量壽佛である。其本無量壽佛とは今釋迦牟尼我身是なりと。

て見れば法身無量壽佛は一切諸大乘教を通じて同一の法身にして現身佛の番々出世の諸佛に悉く同一の佛身、法華に說く如く名字の不同年紀の別はあれども、そは現身の異に外ならず。

法藏比丘と悉達道士

法華經に　壽量　の燃燈佛等の現身佛　無量壽經の過去定光佛とは同一の佛陀、また五十三の諸佛も皆同一の現身佛の不同名字一體に外ならず。往昔法藏比丘として、五劫に思惟し兆載に修行し六八の大願を發して、衆生大安の道即ち本佛の無爲涅槃界を開きて、衆生を　の本覺に歸せしむるも、釋迦六年に修行し、伽耶の道場にありて無量光の正覺を發見し、無量壽の涅槃に歸する道を開き玉ひしも同一の異現身なれば法藏は十劫の往昔に示現したる釋迦にして、釋迦は現劫に出世したる法藏比丘である法藏比丘十劫に正覺を成すと云ふも、其實は久遠實成にして、釋迦伽耶の道場實成と同一の眞理なり。

一大事因緣經と法華の壽量品とを參照せよ、理明なり。

如是、宗教上の眞理は已に宗教の眞髓に徹底せる仁士の爲には敢て贅言を要せざれども、世間に宗教を單に教權文字に泥みて文外の眞理に達せざるもの丶爲に之を書かざるを得ざるなり。

法藏比丘とは其實は印度古代の求道者にして大宗教家なので凡て大宗教家が一切衆

生を若しくば生活苦惱の中また罪惡迷沒の中より救濟せんとの志望は無量壽經の法藏比丘が世自在王の許に於て陳述したる想言は事實である。凡て經文は全く廣大な言を用ひて、其理想を象徴せる如きは事實に遠ざかるの嫌なきに非ざるも、衆生に宗教の大安の光明を發見して、是を心靈の涅槃城に攝取せんとの志は大宗教家としての法藏の志願は發さゞるを得ず。或は釋迦自己の宗教的思想を往昔に投映して法藏發願の因緣に成りしと云ふも不可能ならざらん。

法藏比丘の說は、神話としても釋尊已前に大宗教大救世主ありて、宗教的に衆生を救濟せしことの歷史的にありしは疑ふべからず。然らば即ち其哲人が即ち法藏なり。たとひ傳說なりといふも其傳說の發りし者が即ち法藏である。

釋尊が一切衆生を生死の苦よりいかに脫却せんとの本願が即ち法藏の本願である。法藏比丘が一切衆生度脫爲作大安、假令身を諸の苦毒中に止くも我行精進忍び給ふは是所謂宗教家の精神に凝結して現じたる靈態である。其が即ち一切人類を救度　の神の靈が人間として現はれたのである。

或は本願の力を以て淨土を建設し、美天國を構造する如きに謂ひは、本佛法身の靈界中に人佛の靈的精神上に發現すべき宗教上の事實である。莊嚴淨土の說を聞いて疑ふ如きは、却つて自己の精神の……

法藏比丘の已前五十三の番々の諸佛現身佛は即ち前に出でたる法藏なので、五十三佛が結晶して法藏と現じて、思惟及修行の淨土を實現せんの……なり。

舊約と新約

如來と佛陀。從來佛教にて如來と佛陀とは本一體にて、如來即ち佛陀、佛陀即ち如來として、別に分別して居らぬ。然るに今宗教的觀念を明瞭にする爲に。生と佛（天と人）（及天と地）

宇宙の中心最高等の靈界に儼臨して光明十方法界を照し玉ふ天佛を如來となす。地

上に出現し人類に應化したる佛を佛陀と爲す。即ち淸淨なる佛界に在ます無量光と衆生界に出ましたる釋迦牟尼とである。

すべて心靈界淨法界に在ますを如來と號び、人類界に出たるを佛陀と爲す。如來は心靈界の太陽として一切衆生の靈性を攝取同化し玉ふ尊體にて、佛陀は如來を代表して人類に分出して一切を敎化して如來の靈界に歸趣の法を示し玉ふ靈格である。例へば梵網經に盧舍那如來が無量不可思議の相好を具へ蓮華藏の理想世界に在まして、光明遍く十方法界を照し玉ふが如來にて、悉達王子が道士の形として菩提樹下に端坐したるのが佛陀である。

之を心理的に釋せば、佛陀牟尼が始めて正覺を成し、菩提樹下に坐まして、華嚴三昧に入りて、盧舍那如來が蓮華藏世界に在まして、法身大菩薩等の爲に說法し玉ふを觀ず。爰に於て能觀の人は人佛釋迦にて、所觀の境は如來甚深の不可思議の境界に現したる盧舍那如來である。

是佛陀牟尼の心靈の顯現なので、また宇宙の大靈の靈的現象なり。若し佛陀の心靈如上の靈的狀態の有するなくんば、佛陀の正覺何の不可思議業あらん。

故に佛陀は宇宙全一と合したる靈的妙相の方より見れば如來なので、而して完全なる靈格と仰ぐ形體より云はゞ佛陀である。

また法華經の常寂光土に永しへに在ます久遠實成の無量光なる無量壽は是如來にて八十に近き老比丘は是佛陀である。

また密教の（自性法界宮に盧舍那本地常心　四重の圓壇上に在まして、大日如來　中臺　）

心王妙法蓮華曼荼羅は毘盧舍那本地常心々中、四佛四菩薩を　十三大院衆寶合成し十世界微塵數の金剛密慧差別智即ち四重圓壇に微塵數の眷屬を統御して法界宮に嚴臨し玉ふ大日尊は是如來にて變化身釋迦は是佛陀なり。

また無量壽經の無量壽佛威神光明最尊第一にして諸佛光明所不能及乃至無量光乃至

超日月光十二光を以て萬德を統一象徴し玉ふ一切諸佛を統攝し玉ふは如來にて、釋迦及十方諸佛を佛陀と爲す。

大乘諸經に或は大日と云ひまた盧舍那と云また無量壽佛等の靈界の佛を如來と爲し人間の佛を佛陀と曰ふ。

大日と釋迦、阿彌陀と釋迦、華嚴の舍那と釋迦の如きを如來と佛陀に分つ。如來は佛敎中に名は種々無量に表すれども、歸する處は唯一の心靈界の日輪たるに外ならず。如來天佛靈界の中心に在して十方の靈界を照臨し、此光明に攝取せらるゝ者は、人佛出てゝ衆生に敎し法界流布の敎法なき時は衆生何にして光明に攝取せられん。喩へば太陽と地との因緣によりて生物を養成する如く、如來と佛陀の大因緣に依らざれば衆生靈性開發して靈的生命を得ること能はず。聖善導曰く、若し釋迦出世の緣に藉らざれば何でか彌陀の本願を聞くことを得んと。また釋迦此方發遣、彌陀即彼國來迎、此に遣り彼に喚ぶ豈去らざるべけんやと。今現に彌陀は天日の如くに吾らを迎へて慈愛の光明を照し玉ふ。釋迦の指示に依らざれば、生盲の凡夫いかでか夫を知ることを得ん。釋迦はまた衆生に指示すべき人佛なるを以て、經に我法を說くことは月を指すの指の如しと。月とは即ち天佛如來のロゴスに外ならず。

法華經に久遠實成の本佛を如來と曰ひ、伽耶成道の迹佛を佛陀と爲す。

佛陀は非々想の如き最微細なる客體をも空幻華視して肯定し難し。從來の一切の宗敎的客體を超絕して、純粹經驗の如き精神狀態を尙益々進みて、其極、絕對の天眞自性に到達し、自性即ち宇宙の本體、是正しく正覺の光明、自己の本源、即宇宙の自性清淨體、大智光明のみありて顯照す。絕對永恒自存之を如來無上正覺とす。此心靈永恒自存本然清淨之を大涅槃と爲す。佛陀の宗とする處は、自性發見する正覺を得。生死を超絕せる大涅槃を證するにあり。佛陀は宗敎上一切の事實に、正覺を成せる自己の心靈界に經驗出來たる物を以て是認し、正覺の光明を以て照覽するに之に實驗し得ざる物は悉く否認す。爰に於て印度古來よりの傳說及宗敎史も敎理も悉く一新するに

至れり。釋迦已前に已に梵を說くも、客觀に見ずして主觀上に見ざるもの、無にあらざるべきも……

基敎の神の國、通俗信仰にては天國は死後に於て神との福祉を被むる光榮の世界とおもふ。舊約時代には神國は來世を意味せず但神の統治の下に生起せるの意味、神の主權を行ふの謂なり。猶太敎にては神政的王國はメシヤの出現によりて實現すと信ず。イエスは其希待せられたるメシアと信しらる。神の國近づけることを宣傳し、彼は猶太人の現實的意義を許しつゝ他方には國民を超越せる全く精神的の意に解し、神に背き統治を妨げる凡ての罪惡や老死憂悲等のなき、光榮と幸福とのみ即ち神と親しき交なれば神の國なりとせり。然しそは義しき者の精神に始まれるなり。神の國の全き實現は將來に屬すると共に、神國は純粹宗敎的道德的の概念となれり。神の國は神の聖意行はるゝ處、そは實に最高靈的幸福にして又道德目的なりるす。

涅槃

涅槃は佛敎の終局目的とするもの、歸する處、衆生煩惱消え生死の苦盡きたる處。此身は苦空無常無我にして苦ならざるなし。此等すべて凡夫の過失を超絕せる絕對的圓滿完全永く有漏の生活を離れ究竟自然の安穩の妙樂に歸して、其涅槃の狀態は諸の聖人終局の證入する絕對靈態なれば自ら證入する外言語思慮の及ばざるものなれば、其眞狀は文字を以て詮すべきにあらず。若し假に言を以て表せば、眞善美の極り常住安穩自在清淨の四法を以て莊嚴せる處、また彼は唯光榮と常住の平和と永遠の生命とにて、唯光榮と幸福との光明の充滿せる處。

佛陀釋尊無上正覺の時に證得したる、無明生死の夢覺めて、朗然として覺悟したる靈境なれば、佛陀は人格に涅槃の體現者なれば、其當時佛陀の靈格に接する時は、涅槃如何なる狀態なりやは敢へて問ふを須ひざりき。

須摩提と涅槃界とは同體の異名

須摩提は印度吠陀の時代より、幼稚なる宗教思想に、死後の天國宇宙最上の幸福の處、八功德池甘露の泉澄み湛へて七重寶樹の下に遊ぶ時に無量の樂あり。我らが祖先と共に入日の彼岸なる樂苑に往生して、祖先と幸福を共に爲んと云ふ單純なる宗教思想より起り來りしもの、人の精神愈々進むに隨ひて天國觀も益々進歩し、何にしても須摩提といはゞ、宇宙最上の幸福の地と云ふ事は古來よりの印度人の希望する處、恰も猶太人の神國の來らんことを熱望すると等し。而して猶太の神國は基督によりて、神の國は近づけり、必ずしも高遠なる天上に昇るを要せざるに至る。須摩提最幸福の樂園は佛陀釋尊に依つて近づけり。即ち佛陀の禪那三昧に入り、無明の夢醒め正覺の光明來る時に顯現したる絶對永恒の靈城涅槃城は開きたり。生死座斷する時永恒存在の涅槃界は顯然たり。此涅槃界即ち是須摩提なり。是に等しき大安樂の境界あることなし。往昔まだ幼稚の時代には客觀界に天國を想ひ求めたりしが、

大聖佛陀は超然として無明の夢を破り、十萬億彼岸の涅槃界を去此不遠　即ち絶對無爲界なることを覺り淨土遠く他に求めざれ。

須摩提と涅槃界とは同體の異名なので、佛陀に依りて、若し覺り來つて觀れば宇宙全體淸淨國土ならざるはなきを觀破し玉へり。キリストが天國近づけりとの叫び、佛陀が須摩提の門は開けたり、涅槃の常樂の　は此に建　たりと。經に國如泥洹、又次於無爲泥洹之道。又聖善導は極樂無爲涅槃界と。

大乘淨土敎は須摩提を說くに二說　　また天朴の機に對しては、極樂を西方過十萬億土と說き、已に已達の機に對しては、極樂は即ち涅槃界と談ず。

論に觀彼世界相、勝過三界道。畢竟如虛空、廣大無邊際と。彼淨土は本絶侍靈界なれば、盡十方一切處として遍ねからざるなし。天親菩薩は極樂は蓮華藏世界、重々無盡、一塵中に無量刹を具して而も偏虛空界蓮華藏、是如來十佛自境界なれば、唯佛與佛と云々　玉ふ。

本來宇宙は全體法身毘盧舍那の自境界なれば元來諸佛如來の安住處、重々無盡の境界。

十二光

法身無量光如來の萬德を象徵するに、十二光の德號を以て、一切の靈德を現はす。法身無量光佛は一切現身佛の本地法身の尊體なれば、無量の諸佛も其本體を究むれば同一の如來なり。無量壽經には法藏果成十劫正覺の本體として十二光名を顯はせり。

楞嚴經勢至圓通章には、過去無量劫に於て、無量光乃至超日月光等の十二光佛在して念佛三昧の法を敎へ玉へりと說けり。密家の開　密嚴尊者は法身大日如來に無量光乃至超日（約十字分原文紙端斷切）以て大日の萬德を象徵（約十字分原文紙端斷切）釋迦牟尼の本地無量壽は（約十字分原文紙端斷切）光の德號を以て萬法を徵す。

十二の德號如來萬德を表するに缺げて盡さざることなし。名詮自性如來不可思議の德を表すのは名を以て詮表するは最も適切なり。

此德號は名體不離なれば即ち如來の法體なり。名法體に即して名大にして法界に遍在し遍照し遍動する處の法體である。宇宙の本體が即ち無量光なる絶對の大靈態である。無邊光なる大智慧の相である。また無碍自在の力用として宇宙に遍動す。

如來の靈體は絶對無限宇宙全一の大靈體である。本來宇宙は物心不二無礙の毘盧舍那如來にて一切無邊の德性悉く具有して缺ぐることなし。毘盧舍那萬法の尊體に大智慧の光明遍照法界神聖正義の法を以て、宇宙全體を體とす。一切の衆生悉く皆絶對の大靈態中に在つて一切の萬有は相待規定十方三世の形式をなし、萬有相互に因果因緣に相關し、因果に繫りて行はれたり。如來絶對の大涅槃界（約十字分原文紙端斷切）自然界の衆生は（約十字分原文紙端斷切）識らず、本來絶對大靈中の世界（約十字分原文紙端斷切）に在りながら之を明し得ず。如來界中にあり衆生各自己の界を想へり。例へば人の室中に

ありて、蠅は己が居處即ち人間の住居なるを識らず。同一の天地間にありて、猫は猫丈に犬は犬だけに世界を見、精神の進化の程度にして人間に成るにあらざれば、人間の狀態を凡て知ること能はず。例へば　人間の　中にありて人間を識ること能はざるが如く、人間は本如來佛界淸淨佛土中にありて自ら誤　宇宙を唯人間界として之を認識するに過ぎず。

肉と靈

大靈の二屬性全智全能即ち智慧と意志とである。大靈は智慧と意志とにより、宇宙萬有を發展するに、萬有內存の一切智によりて、萬物を生成するに秩序あり。整理あり。萬物を生活活動せしむるのが內存の能力である。

此運動は小宇宙なる人に現しては肉の生活に必要なる意志即ち運動となり、全知の分なる人の智慧となる。然しての肉の生活に必要なる運動の働きが發達し、理性の智は後に發達して、肉の生活には胎兒たりとも蠕動せざるなく、小兒も能く呼吸し運動す。是全能の分現にて此運動によりて生存活動す。然して人の身體機能を完成せるには肉の生活は能を本として理智は肉の(以下斷絕)

辨榮上人樣の私への御慈訓

辨　隆

明治四十二年十月かでしたか井深重剛樣方に辨榮上人樣御巡錫被遊あまり尊くありがたく感じられ、御歸りに御立寄りを御願しました。

色々御慈悲の如來樣の御話を承はり、又御念佛申されよとおすゝめに預り、又結緣の爲とて御米に御名號樣を御書き被下、又高座の上にて御名號樣をサカサマに書き、私の方に向けて御書き被下ましたのを頂き、以後お守本尊と致し喜び御念佛相續致し居りました。又紙の先にて御觀音樣をお書き被遊、又法然上人樣の御歌を右の手にて右へまるく左の手にて左へまるく御書き被遊、又指の先にて、筆よりもきれいに歌をお書き被遊る御事等、實に稀有人にて、凡人に非ずと參詣の者一同不思議に思ひ、御佛を御書き被遊ても御面像に何とも申されぬ難有き尊き御相好に拜せられましたる今に忘れられません。

夫れより御說敎には何も外の御話はなく、唯お念佛申せば吾々も斯の如く、觀音樣と同じ心になりて、淸淨歡喜智惠不斷の御光明に照されて、日々難有く日送り出來得ると吳々御說明被下、十二光佛の御話又は仰信解信證信の御話、十八願の信樂欲の三心の御說明を聽聞致し、何は兎もあれ、一心に念佛せよ〳〵との仰せを蒙り、一心に念佛申して居りました。辛ひ自分は將來は如何致さうと庵室の一間にて考へ居る處なれば誠に是れ大ミオヤ樣の御慈悲の御光明に攝取せられ念佛申せば如來樣の御計らひに預る事と安心致し、將來は兎に角、今日を大事と喜び生活致す事と成りました。夫れより十九日か二十日に多分羽島郡正木村岩佐樣方へ御出立被遊たと思ひます。夫れより所々に御巡廻被遊給ふて十二月廿日後に又本誓寺樣へ一週間、如來樣をお書き被遊るとて、御滯在に相成り每夜寺內一同御弟子さん方に修養談をなし給ふて御問かせ下されました故、森崎庵主樣の御供申して每夜聽聞に參りました。

其の時、平重盛公四十八間の御堂を造り、四十八日々夜を御營まれし御話は、こゝろのやみのふかきをば、とうろの火にて照すなれ、みだのちかひを頼む身は、照さぬ處ぞなかりけり。

又清盛のおそばつき祇王祇女のお話に外にキレイナ娘あり故に佛々と申した由、其の佛娘が御氣に入り祇王祇女は御氣に入られない爲か、山に入りて佛道修行を致さんとて其の時の歌に

佛もむかしは凡夫なり、凡夫もさとれば佛なり、三因佛性ありながら、へだてらることかなしけれ。

尙又、

もゑ出るもかるゝも同じのべの草
いつかはあきにあはではつべき

といふ歌を承はり、實に我も三因佛性ありながらへだてられ、殘念と思ひ、一心に信仰に入りたきものと感じました。又、

うち向ひお名をよべどもよそ心
てらす佛のかたぞはづかし。

智惠ありて萬事かしこき人にても
ごしやう知らねは愚人なりけり。

こゝろこゝにあらざればみれどもみえず
きけどもきけず食へども其味を知らず。

一人來て二人旅立つうれしさよ
阿彌陀佛を道づれにして

いきながら彌陀の誓にのりのふね
さして終りをまつぞうれしき。

ともすればうきたちやすき世の人の
心のちりをいかではらはん

子を捨てるかたみのそとばいかばかり
さらではなんとをやをたすけん。

奥山にたをるしをりは誰が爲
我身を捨てて歸る子の爲

大江山幾野の道も遠ければ
まだ文も見ず天の橋立

世の中に我物とてはなかりけり
身をさへ土にかへすべければ

人の心鏡にうつるものなれば
さぞや恋のみにくかるらん

寢れば夢覺むればうつつつかのまも
忘れがたきは彌陀のおもかげ

昨日まで鬼のすみにし胸殿が
今日彌陀尊の御堂となる

かくまでにちぎりも深き御佛を
知らで苦しき年を經にけり

出る息の入る息またぬ世の中を
長閑に君はおもいぬるかな

ものは云ほねど天地のよときは常をあやまたず、
春はめばへて夏しげり　秋はみのりて冬おさむ

等の御歌もお聞かせに預り、又耶輸陀羅女の御出家被遊給ふ事等委しく御聞かせを蒙り誠に難有次第にて寢ても覺めても、念佛申して居りました。其の内に自分も森崎庵主様にお願申しで弟子入りをして下されませとお願申し置き又、辨榮上人様にも、本

誓寺様の御書き相終らせ給ふて、十二月廿八九日頃羽島郡笠松智光庵へ御立寄被遊御事と相成り御供を申上げ、御わかれに何卒如來様へ御願申して、御因縁定まり、出家するなれば是非共得度御願ひ申上げますと、御依頼申し置き、其の時、山崎上人様は將來の目的を定め、如來大光明中に活動せねば、人間の肉を受けしかいがないですと御すゝめ下されて御別れ申し、実家より色々と申し來れ共聞き入れず、朝夕は十二光佛の禮拜を申し上げ、歡喜光中に日送り申し、又庵主様が朝夕阿彌陀經の勤行、若一日若二日……と同じ事ばかりの御勤めを拜し、御經を拜借致し、私も佛間の隣座敷でお讀みなさる處を見て居る内に、追々と覺ゆるやうですから、何卒弟子入をお願申しますと頼み居り、彼れ是れすると、お上人様よりお葉書に御觀音様をお書き下されて

仰いで如來の心光を觀ず、又下に昨日は寒風の中御送り下され多謝候、願くば如來光明中に萬難を凌ぎ、菩薩の修行せられん事を望み候、庵主のきみにも宜しく、

とのお葉書賜はり、益々萬難を除き一層信仰に入り度存じ南無阿彌陀佛を勵みましたすると明治四十三年一月元旦と相成り、お上人様より御年祝狀を頂戴仕りし御文に

あらためて祝ふ言葉もなかりけり

南無阿彌陀佛の御名の外に

あらたまの光にみへてあけわたる

年の祝に御名をとなえむ

あゝ目出たし無量壽佛の御名をもて

ことぶく外に心も言葉もちがはじと

萬代と祝ふもしばしかぎりあれば

無量壽佛の御名ぞ目出度し

あらたまの年の祝に煩惱の

いぬもかわりて菩提とはなれ

右の歌を承はりやはり御稱名の外道無き事を感じました。又本誓寺様の台所に、お上人様の御尊筆にて御じくものゝ御文に

問何故二辭二父母親愛之虚家一入二佛法修行之妙門一耶。問以二當今修行之分齊二可レ消二十方檀那之信施一耶。問以二當今修行之分齊二可レ解二脫生死之牢獄一耶。問知三無常迅速而出レ息ハ不レ待二入レ息一耶。問知二一タビ失ヘバ人身一萬却モ不レ還ラ耶。」

此の文をうつし置き、彼れ是れ致し、益々出家致し度き考にて、兩親へ相談致した處夫ればとても修行出來得る事能はず故とて許しくれず、益々反對に出で人を以て止めん事を申し來り候へ共、自分の心は止めよと云はれると尚更出家に成り度相成り如何致しても又實家へ行く事出來ぬと云はれてもよろしいからと決心致し、若しも修行出來ずして終ると、誠に兩親を始め親類迄申しわけなき故とて、許しくれませんで又そんな事なれば、實家へ來る事ならぬと申されました故、行けなくともよろしいとて、庵主様に髪を切つて被下と申しても兩親より不足の來るから困ると仰せられ、聞き入れて下さらぬ故、止むを得ず實家へ歸り、村内の氏神様の御前にて、自分で髪を切つて實家に二三日居りますと、本家のおばあさんが、そんな事なれば早く庵寺へ御願申し弟子入を願はねば仕方がないと云ふて來て下されて、誠に難有く感じ、夫れより兄に送られ、庵寺へ參り、其の節一ヶ月程御上人様は名古屋貞養院に二十五菩薩をお書き被遊て御滯在中なれば、度々庵主様へ武藤氏は如何致しましたと御尋ねに預り實に難有き仕合せ者なるか、三月十日を歡喜日と致し得度式をお願ひ申し上げ、お上人様は名古屋より前日に御足勞を乞ひ、色々用意をなし御待ち申して居りますと、お上人様はいつもお變りなき御うたてしき御尊顔にて、いよ〳〵決心致しましたかと仰せに相成りし時の御言葉今尚心に留まり居ます。

明治四十三年三月十日剃髪式度牒「法尼辨隆　佛曰一向專念無量壽佛仰願一切行者等一心唯信佛語、不顧身命、決定依行、佛遣捨者即捨、佛遣去處即去、是名隨順佛教、隨順佛意、是名隨順佛願、是名眞佛弟子、維時明治四十三年三月十日於當尊像前、行

剃度式授戒畢、心光敎會主唱者大僧都眞譽辨榮」

御ハンを頂き、大切に保有申し、時々拜讀し奉り、又剃度式の御文を書きうつし置き之も度々拜讀致し、大丈夫の心を起し、佛道修行せねばならぬとののみ存居候、夫れに上人樣は大垣求淨庵へ御巡廻成し給ふて、又御尊書賜はりその文に、

「滯在中は厚き供養を受け、其の上又出立の砌御送りまで厚く多謝候。しからば明十四日午前十二時八分當驛出發憚さまながら手荷物停車場まで出し被下度賴候。覩じ來れば光陰の道ゆく暫くも止むことなし、今日空々に經過すれば再び復るなし、只須らく如來の光明の中に聖旨に隨ふべきつとめを以て、自ら精進し、又世の人には目前の塵埃にくらまされて、心は闇黑の中にあり、希くば如來の光明を點じて光の生活たらしめんことをすゝめてほしく候。辨隆きみよ初發心時分が最も大事にて候。寢ても覺めても、如來大益を憶念し光明名號を唱へて、早く光明界中の人と更生せられん事を自己の精神に如來の心光赫々として、とゞまりつゝある樣にならまほしく候。まづは匆々。

誠に御慈悲の御心實に感謝に堪えず候。南無阿彌陀佛々々々々々々。

夫れより毎日庵務を致し、御念佛諸共日を送り、又庵主樣より讀經を敎授に預り居りし處、十一月頃勝手氣儘の者の事とて、庵主樣の御氣に入らず、僅かの間違より、彼れ是れ致しお暇を頂き、其の隣に蓮光寺と申す寺に老尼あり、留守居を致し居られ至つてお上人樣を御歸依申し上げ、貞善尼と申され、念佛行者と承まはり、其の人に隨つて一ヶ月程御世話になり、右の次第をお上人樣に申し上げ度も何處に御巡回被遊や不明の爲、殘念に思ひ、四十四年二月十何日より五日間、岐阜市伊奈波前法圓寺樣へ御別時に御巡錫被遊給ふ事、前年より御定りに相成り居り、夫れ迄何處にても一人で御念佛申居度と存じ居り候へば、如來樣御慈悲は誠に不思議にて、蓮光寺の座敷に元名古屋の士族にで横井時棟先生今は佛敎の信者にて、三十年以來佛書を拜讀し、念佛三昧の信者にて、他人にも佛書講義等なされ、誠に難有き人なるが、其の人の田舍の内が留守であるから、何卒其の内にて念佛修養せよと、申し被下候爲、早速御願ひ申し二月迄御世話に相成り御上人樣に何と申し上げやうと心配致し、庵寺を出たなら何と仰せられ、又何とお叱りを蒙るかと、夫れのみ十一月以來、お上人樣にお目にかゝる迄、大心配致し居候處、貞善尼法圓寺樣へ、參詣申され、私が御上人樣へ御斷りを申し上げて上げるから、一所に來られよとの事にて、心配ながら、お上人樣に御拜面申し上げ、右の次第を御聞き入被遊、やはり御慈悲のあまり、あゝ左樣かそれは互にあき性であるからそれなれば今暫く修養して、以前より仰せになりし、埼玉縣の方にて女子信仰を興へ、裁縫敎授を開くと常々仰せられました故、將來はそれへ出らるゝ樣と仰せ被下まして、心配致し居りし程はなく、御慈悲の眼に惜くしと思ふ者はなし、罪あるものぞ尙あはれと思召し、夫れから夫れ迄お尊き下され、あんな難有き事は忘れられません。

又五日間の御別時中毎日毎夜御法の御話のみ承はり、實に難有く感じ、念佛相續致し、それより本誓寺へ御巡錫被遊、又御供を申し、又山縣郡門屋長勝寺樣へ御巡錫被遊れ御供申し、稻葉郡折立超勝寺樣へも御供申し、色々將來の事なども御聞かせに預り超勝寺桑原上人樣に、佛書を敎授なし下されと迄御願ひ致し置き被下給ふ事の御親切等、實に難有き次第にて、暫く御世話樣に相成り、又本誓寺樣にも御厄介に相成り佛書を御敎授に預り居る中、所々御巡廻被遊れ、お上人樣は東京へお歸り被遊れ給ひしに依り、其の後名古屋の尼庵へ行けと申されしに依り、御上人樣へ御照會申上げしに、其の御返書賜はりしに、

巡敎先、取急ぎ端書を以て御返事迄、名古屋尼庵の事折角古川師の御親切なるおすゝめなれば、それは良き事と存じ候まゝ、超勝寺樣の御意見をも承はり、御賛成に相成り候はゞ、其の事に致して、然るべしと存じ候。それにしても時間を惜しみて、佛道修行は勿論、人格を爲すにつきものゝ事は得べき限りつとめらるゝ樣致され度候。桑原上人樣へ宜敷願候。

との御高書賜はり候て、如何致さうと考へ居たりしに、或人の申し下さるに、いくら教授に預れ共、男僧地に居るは他人が色々と申すの事、それも尤もと感心致しました。其の内に又、蓮光寺の貞善尼の御仰せに、岐阜の淨土院に八十二歳と七十歳の老尼のみ故、何卒淨土院へ手傳に行けと仰せられたるに付、あちこち致し居るより、念佛して二十五靈場めぐりに參らうかと考へ、右の次第をお上人様に御尋ね申上げし處其の御返書に。

（初略）

廿五靈場巡りの事は、若き女が獨りあるきはよくない。又、惡習慣がつくと、一生取りまとまりし事もなく送りてしまう様になる。都合上本年中位加納淨土院二人の老尼の爲に介抱してやるも功德に成るから、するも宜からう、なれば早く行きて介抱してやるが宜からう。（後略）

との御返書賜はり、早速淨土院へ參る事に致しました、七月の盆前に淨土院へ參りますと、七月の中頃より蓮光寺の老尼重病にて、一週間程の病苦にて、ナムアミダブツ〳〵と日出度往生被遊れ、日夜病床にて稱名致し、悅び〳〵淨土に歸られし事をお上人様に申上候らひし處、其の御返書に、

承はれば、貞善法尼は、七月二十三日　有爲の穢身を捨てゝ、彼の法性常樂の靈國に到りしとの事、實に老法尼は勇猛精進の行者三昧發得の希有人、此の塵埃にまみれて汚れたる世の人にこそ知られねども、深く三昧に入りし勝〇は即ち彌陀より外に知る人はなし。法尼は他に勸化の方にていまだ至らざりしも自分の證得せし事は實に日本は廣く自他宗に老尼衆數多あれども、法尼の如く、深く三昧の境に入りし者は實に稀有なりし。

自身は已に充分に致したる故に、蓮光寺にて草を取り、佛前に仕ふるも惡しからねど、より〳〵は彼の報土に入りて、正しく　大**ミオヤ**の御許に到りて諸上善人と共に一所に會することの身になりしほどこそいかばかりか勝れしぞ。實にめでたき女菩薩たりし。

御身も自行を專らにする方は、彼の法尼に倣ひて、三昧發得を期せられかし。心には常に如來を觀察憶念し、口に稱名を捨てず、然る時には身になす所いかなる事も是れ佛行なり　大**ミオヤ**を常に忘れざりし哉。如來の光明中に心は安住しつゝある哉年老ひたる僧衆には、及ぶ限りの力をつくして能く仕ふべし。是れ何よりの功德にて候。何でも年よりは安心して悅ぶ様に、眞實心にせられたし。十二光の中清淨光は日々凡夫は見聞きするにつきて心をけがす。それを洗つて清く、潔くして下さるのが斯の光である清く潔く快活に、又歡喜の中とに充滿のなかに日々を暮されたし。若しこの光明の觀念を離るれば、自ら闇黑となる。夜分には十二光佛名を以て禮拜を必ずつとむべし。若し緣なき人には、光明歎德章を讀ますべし。又時間ほど大切なものはなし、日々徒らに費すこと勿れ、埼玉の方は漸々に女子宗教的も進みゆく見込にて候。將來はこちらに來りて、光明の中にはこう〳〵決心を以て、ます〳〵今日を大事に修行せられたし。」と

それより暫く淨土院にて、手傳致し日々法務致し中、十一月七十歳の老尼死去致されし故、止むを得ず、四十五年二月迄、手傳致す事に致し置き、務め居ると、淺草の誓願寺様に御滯在中の御尊書に、

「如來即ち　大**ミオヤ**様は、十二の光明を以て、晝十二時夜十二時、暫くも休止し給ふことなく我等を照し給ふ。此の光明の時間を空しく過しなば、又再び歸らじこの頃いかに過しなさるや。其の後久しく便をきかず今日〳〵を徒らに暮して、一生得ることなしに終らば、實に取かへしのならぬ事にて候。」

（未完）

大正十五年八月廿五日印刷
同　　廿五日發行